

キャリアコンサルティング技能検定1級の実技試験の採点を担当した採点官、面接試験官から寄せられた意見を掲載いたします。本稿は受検者個々人の課題を表すものではなく、受検者全体の傾向として取りまとめたものです。なお、これらは合否判定結果とは一切関係なく、試験の合否について説明するものではないことをご理解ください。

キャリアコンサルティングの経験を積む中で、事例指導を行うとともに、自身のキャリアコンサルティングについても指導を受けるといった繰り返しを通して、さらによりよい支援ができるようになると思います。本掲載が指導者として、そしてキャリアコンサルタントとしての能力向上を図る学習等の参考となれば幸いです。

## <実技（論述）試験の傾向>

### ■「相談者が訴えた「問題」は何か」について

- ・相談者が「何から始めればよいかわからない」といった状況にある中、相談したいこと（主訴）を適切に要約して記述できている回答が多数見受けられました。
- ・一方で、設問における主語（誰の問題か）を明確に理解されていないと思われる回答もあり、「相談者自身の問題」と「事例相談者（キャリアコンサルタント）の問題」が混在して記述されている、あるいは事例相談者の問題に過度に言及している回答も散見されました。また相談者の状況説明に終始してしまい、肝心な相談したい内容が曖昧な表現になっている回答も見受けられ、表現の曖昧さも課題として挙げられます。

### ■「あなたが考える見立てに基づき、相談者A自身が問題を解決するために取り組むべきことは何か」について

- ・単に課題の提起に留まることなく、「取り組むべきこと」について、根拠に基づき的確に記述されている回答が増えた印象です。
- ・一方で、相談者の課題に対する具体的な行動に関する記述が不足している回答も少なくありませんでした。単に「自己理解不足」「仕事理解不足」といった課題を列挙するのではなく、「自己理解・仕事理解をするために何をするか」という具体的な行動まで落とし込んだ検討が必要です。また、見立てに基づいた取り組みであるにもかかわらず、その根拠や、相談者がその取り組みを行うことで「どのような変化や成果が期待できるのか」という視点が乏しいと感ぜられる回答も見受けられました。さらに、事例に記載されている情報以外の推測や、過度な拡大解釈に基づいた記述が一部で見られたことが気になりました。

### ■「相談者A自身が自分の問題を解決するために活用可能な社会的ネットワークは何か」について

- ・相談者が活用できるネットワークが幅広く多様な視点から検討・記述されている回答が多く、全体としての確さが向上したように感じました。
- ・一方で、一般的な内容や定型的な記述に留まっている回答が散見されました。具体的なネットワークを挙げたとしても、本ケースでの「活用目的」や「期待される効果」が曖昧だと感ぜられる内容もありました。「そのネットワークを何のために活用するのか」という視点は必要でしょう。

### ■「事例相談者の相談者への対応について「問題」だと思ふこと」について

- ・事例相談者の課題や対応の不足について、的確に捉えた回答が多く見られました。
- ・一方で、前年度から繰り返しのお伝えになりますが、どの事例にも当てはまる一般的な回答に留まるものが多く、事例に沿って「なぜ・どうしてその対応が問題なのか」「面談のどのような段階で問題が発生したのか」など、具体的な根拠に基づいた論理的な記述になっていない回答も少なくない印象です。加えて、事例相談者の問題に対して、表面的な現象は捉えられていても、事例指導で改善を図るべき本質的な問題の捉え方が甘いものが多く、例えば「関係構築」や「信頼関係が築けていない」など課題への言及が明確に表現されていない点が気になりました。

### ■「事例相談者の「問題」に対する、事例指導（またはスーパービジョン）における具体的な指導方法」について

- ・具体性という点については、課題はあるものの、問4（事例相談者の問題点）の把握が適切にできている受検者においては、問5の指導方法についても、方向性としては適切な記述ができていると感

じました。

- ・一方で、以下の点が課題として見受けられました。
  - ・優先して取り組むべき指導内容が複数羅列され、「あれもこれも」と盛り込まれることで、現実的に対応可能であるか、疑問を感じる回答がありました。またその指導を行う必要性や、指導によって事例相談者にどのような変化を期待するのか「狙い」が明確に記述されていないことについては、物足りなさがあります。
  - ・事例相談者が主体の指導になっていない点も気になりました。指導内容がやや一方的なものとなっており、事例相談者自身がその指導を納得して受け止め、その後の実践にどう活かせるのかが分かりづらいと思われる回答も多いと感じました。

## <実技（面接）試験の傾向>

### ■ 面接試験全体（ロールプレイと口頭試問）について（総評）

今回の面接試験（事例指導）では、多くの受検者が高い専門性と誠実な態度で臨んでおり、日頃の研鑽の成果として、基本的な態度や関係構築への意識、指導プロセスの理解などが感じられました。より質の高い指導を目指すためには、「指導者としての視座の確立」が重要ですが、事例相談者と同じ視点に留まりがちなケースや、「問題の本質の把握と共有」が不十分のまま指導が進み、具体的な解決に至らないケースも少なくありませんでした。また、指導においては、専門知識を事例相談者に「伝える言葉」で概念化し、説明するスキルも重要です。これらは事例指導の核となる部分であり、理論の学習に加え、指導経験の積み重ね、さらには受検者自身が定期的なスーパービジョンを受けるなど、継続的な自己研鑽が不可欠です。私たちキャリアコンサルタントは、より良い支援を提供するために、今後も継続的に自身の相談支援を振り返る機会を設けていくことが求められます。

### ■ 基本的態度について

- ・多くの受検者から、事例相談者への敬意と、誠実で受容的な基本的態度が感じられました。ロールプレイ中の自身の言動を客観的に振り返り、改善点を素直に受け入れる適切な自己認識と、振り返りの姿勢も確認できました。加えて、職業倫理に基づき、自己研鑽の必要性を認識し実践する意欲とプロ意識も示されていたと思います。
- ・事例指導を通じて自身の課題や自己研鑽のテーマを明確に提示できる受検者が増加しており、この傾向は心強く感じられました。
- ・基本的な態度は良いものの、指導者としての立場や試験を意識しすぎた言動が、不自然さや不一致として見受けられた点は気になりました。具体的には、以下のとおりです。
  - ・アプローチと実際の言動の矛盾  
「来談者中心アプローチ」を掲げながらも、実際には一方的で指導的な言動や、指導的立場にあるという姿勢の過度な強調が見られました。
  - ・一般論や定型的な対応  
自己研鑽に関する回答がロールプレイの内容と関連付けられておらず、事前に準備された一般論や定型的な対応に終始している点が気になりました。
  - ・事例相談者主体ではない対応  
一部の受検者は、緊張から自己に意識が集中しすぎたり、自分のペースで持論を展開したりする傾向が見られました。

### ■ 関係構築について

- ・キャリアコンサルタントとして、多くの受検者が基本的なリレーションシップの構築を重視している姿勢が見られました。特に、事例相談者との育成的な指導関係を築こうとする姿勢や、真摯に向き合い、理解しようとする点が挙げられます。
- ・傾聴と受容の基本スキルが身につけている受検者が多く、事例相談者との適切な関係性やラポールが構築できていると感じました。さらに、丁寧で自然な対応ができ、圧迫感なく事例相談者のありようを受け止めている受検者が多かったです。
- ・一方で、基本的態度の内容と少し重なりますが、「指導者としての深さ」や「立場」を意識しすぎた結果、不自然さや形式的な対応が目立ちました。具体的には、丁寧さや共感的態度はあるものの、事例相談者やその先の相談者に対し「どうすれば役に立つのか」という親身さが伝わってこない等です。さらに、共感力を過度に求めすぎている受検者が一部で見られたことが気になりました。
- ・事例記録から憶測で判断している受検者が多くなった印象で、これが関係構築の妨げになっている可能性があるのではと感じました。

### ■ 問題把握について

- ・事例相談者の「見立て」の重要性を理解し、その背後にある相談者を含めた状況を深く把握しようとする姿勢が見られました。具体的には、問題の本質を捉え、表意だけでなく含意もしっかりと把握

しようとする意識や、事例相談者の話を整理し、課題を明確化・共有しようとする努力が多くの受検者に見られました。また、必要な情報を的確に得るための、無駄のない適切な質問ができています。受検者も多くいらっしゃいました。

・一方で、事例相談者の課題を見極め概念化することができていない受検者も見受けられました。具体的には、事例の表面的な状況把握に留まり、事例相談者と同じ視点でしか捉えられず、指導者としての視座を上げられていない点です。また、問題把握後のプロセスとして、受検者が把握した課題を事例相談者と適切に共有できない場面が目立ちました。例えば、一方的な指摘となったり、逆に共有に固執し過ぎて時間が不足するなど、アプローチにご苦労される場面も散見されました。さらに、事例指導の目的が事例相談者の問題解決に偏っている傾向も見られました。問題把握においては、事例相談者のスキルや能力を客観的に見る力が求められます。

#### ■ 具体的展開について

・多くの受検者が、課題の把握から目標設定へと続く指導プロセスを意識して面接に臨んでおられました。特に、事例相談者が受け入れられる実現可能な目標を設定し、同意を得ている場面が増えた印象です。また、事例相談者の状況に配慮しながら、求めに応じて適切な情報提供や助言を行う意識、さらには専門家を育成するという視点を持って指導に当たろうとする姿勢を確認することができました。指導の質においても、指導プロセスを踏まえた適切で専門的な介入が見られ、受検者の研鑽の様子が伺えました。

・一方で、問題把握の不十分さが原因で、目標設定が曖昧になるケースも少なくありませんでした。具体的には、慎重になりすぎる傾向から、意図的な指導や介入が欠けてしまうという点です。また、事例そのものの解決ではなく、理論の紹介に留まってしまい、実際的な指導の流れにならない場合も多かったように思います。さらに、指導の流れを型として実践しているように感じられる受検者も一定数おり、事例相談者の個別性に着目した対応が不足している印象を受けました。

以上